

平成29年7月23日(日)

老球の細道344号

指導者が作る限界

会津バスケットボール協会 室井 富仁

ミニから大学までの大会プログラムを見ると、フルエントリーでメンバー表が完璧に埋まっているチームは数少ない。特に私が昔関係していた高校のカテゴリーでは、新人戦の頃になると、ほとんどがフルエントリーできなくなっていた。フルエントリーできる貴重な学校は常勝強豪校に限られる。

今は昔、漫画「スラムダンク」が多くの人に読まれ、マイケルジョーダンの全盛時、部室からナイキのシューズが盗難される事件が後を絶たなかった時代があった。その頃私は会津高校でコーチをしていた。当時の部員は男子だけで50名を越え、練習するのにもままならない状態だった。時間の経過と共に「成績が下がった」、「レギュラーから外された」などの理由で退部する人数も多かったが、それでも20名以上は常時在籍していた。

コーチであった私が一番苦しんだのは、大会を前にして誰を15名のエントリーメンバーにするかであった。勝負の世界は原則実力優先である。メンバーから外れた者は涙を流しながら、なぜ外されたかを問い正しに来る者もいた。この時こそ情を捨て鬼になる。

あんなに多かったバスケット人口が、なぜ今こんなにも少なくなってしまったのか。

【最近の子どもは認められないとわかると、自己防衛のために限界を設定する。「僕には無理」「能力がない」と自ら予防線を張ることで、自分自身が傷つくのを防ごうという心理が働く。しかし、子どもが自ら限界をつくるような指導を行っている指導者にも大きな責任がある。勝利至上主義に陥った指導者は、技能の劣る子どもには叱責、無関心で子どもの自尊感情をそこなうような接し方をしがちになる。その結果、子どもは自尊感情が低下し、努力しようという気持ちと行動は減退し、あきらめの気持ちが心を支配しリタイアしていく】『コーチングクリニック』2013/11月号

では、そのような自尊感情を低下させないで、いつまでもバスケットボールに関わる子ども達を増やすにはどうすればいいのか。目標設定のさせ方に工夫が必要であるという。

【目標には自我志向性と課題志向性の二種類がある。自我志向性は、能力について他者との比較で高い評価を得ることを目標とする。一方で課題志向性は、新しい知識や技能を習得することを目標とし、自分自身の技能水準に基づいて、さっきまでの自分の技能をどのように向上させるかということになる。

競技スポーツを行う高校生を対象にした調査によると、自我志向性よりも課題志向性が高い人の方が、目標への挑戦意欲や練習意欲、有能感が高いという結果が得られている。目標設定の際に他者との比較ではなく、自分自身をどのように伸ばすかという視点に立つことの方がより重要である。そして、その目標達成に向けて、自分は何をすべきであるのかを考えて取り組み、それをサポートする指導者の役割が果たされるならば、子どもは安易に限界をつくることなく、スポーツの面白さに触れることができる】(同上)

すべては指導者にあり。肝に命じるのはコーチの神様ジョン・ウッデン(元・米UCLA)の成功の定義。これを選手に伝えられなくて指導者(コーチ)と言えるのか。

「成功とは自分がなれるベストの状態になるために最善を尽くしたと自覚し、満足することによって得られる心の平安のことである」と。